

## 深みのある英語教育を目指して - 歴史的視点が与えるもの -<sup>1</sup>

宮 前 和 代

### 0. はじめに—「ことば道具論」への挑戦

「世間では外国語を学習することが広く推奨されている。一方で言葉の構造や機能、仕組みそのものを対象として取り組むことは、不思議なことに歓迎されない。ことばが大好きで、熱心に文法表を暗記したり微妙な語法を調べたりしていると、どこからかこんな声が聞こえてくる。

『ことばそのものを目的にしてはいけないよ。ことばなんてただの道具なんだからね。』

道具は使ってこそ意味があり、ことばそのものに熱心になることは、本末転倒である。だから言語学は嫌われる。」(黒田 (2016:69))

黒田が指摘するように「ことば道具論」は根強く、外国語教育の領域でも道具としての視点が何よりも強調されるようになって久しい。英語教育の理想的なゴールは、古くは「生きた英語」というどこか奇妙な表現で語られていたし、グローバル化が声高に叫ばれるようになってからは「ツール」「スキル」という曖昧なカタカナ語が英語教育のキーワードになった。

大学の英語教育現場においても各科目の目標は「英語を使って何ができるのか」という表現で明示することが求められ、道具として使えるようにならなければ意味がない、つまりその科目は役に立たないと解釈される傾向が強

---

<sup>1</sup> 適切なご指摘を賜った論集編集委員の方々に心よりお礼を申し上げる。

くなってきた。文法や語法の違いを細かく論う授業は不適切、言語学・英語学研究を土台にしたアプローチは不要であるとして嫌われる。ましていわんや英語史である。現代英語のスキルを身につけることが目的なのに、数百年も前の英語の知識が何の役にたつというのか。英語教育の現場には全く無駄であるという認識もやむをえないのかもしれない。

しかし、この見方はいささか短絡に過ぎる。第一に、言語が意思疎通のための道具であることは言うまでもないのだが、その視点のみが強調されてしまうことは、言語が持つ他の特質や外国語を大学で学ぶ意義を矮小化してしまう恐れがある。言語は、意志や思考を伝達する前にまずそれを構築するツールであり、文化や教養の土台である。外国語学習は母語を客観化し意識的・効果的に使えるようになるきっかけになることも多いため、外国語のしくみを分析的に学ぶ意義は大きい。

そして第二に、言語学・英語学的な接近方法は、英語を「道具として使えるレベル」まで身につける、そのためにこそ有用だからである。中でも英語史は、現代英語の仕組みを深く理解する視点を与え、その理解を使えるレベルまで定着させるために大きな貢献ができると信じる。

「役に立つ」英語とは一体何なのか、大学における英語教育では何をどのように教えることが重要なのか。英語学、特に英語史はどんな意味で「役に立つ」のか。本稿は、英語史の知識が英語教育にどのような深みを与え得るかを示す試みである。

## 1. 英語史を知るメリット

前述したように、英語史と聞くと「役に立たない」最右翼と考える向きは多い。現代英語の習得に四苦八苦しているのに、今は使わない時代遅れの英語に時間を使う余裕などないと感じてもある意味当然かもしれない。もちろん本稿でも、学習者に古い英語の用法を詳細に教え覚えさせるべきだなどと主張するつもりはない。

しかし実は、古い時代の英語は、現代英語文法を深く知るために極めて大

きな手がかりを提供してくれる。現代英語にはさまざまな「不規則」「不合理」が存在するが、それらは往々にして過去の痕跡である。過去を知ることで、納得できなかった英語の不合理的な現象が合理的なものとして腑に落ちる。納得できれば覚えられるし、自信を持って使えるようにもなる。英語史の視点から現代英語を解くことは、一見遠回りに見えて非常に教育効果が高いのである。

また、言語を通時的に見るという経験は、グローバル時代における英語のヴァリエーション (Englishes) に対する理解も深めてくれる。現代英語の仕組みのみでなく、母語を含めた言語一般の多様性や普遍性、その時間的・地理的変容についての認識も深めることができるのであれば、それは英文法を「閉じた」規則体系として暗記し、日本語と遮二無二 1対1で対応させようとする勉強方法よりもはるかに有意義な学習となるのではないだろうか。

そもそも英語史は、英語という「生きもの」が経てきた軌跡を記述し、一つ一つの変化の経緯や理由、意義について言語学的・社会的に考察し、英語の本質に迫ろうとする研究分野である。広義の歴史学がそうであるように、過去を現代から切り離された静的な事実として記述することが目的なのではなく、現代に連なり未来を予測するための動的な視点を備えている。1つの史実に対する解釈は様々で、わかっていないことも研究者の間で分析が異なることもたくさんある。言うまでもなく、本稿は、この広範な研究分野を英語教育の中で体系的・理論的に教えようと提案したいのではない。あくまでも、英語教員が基礎的な英語史の知識を持っていて、授業の中にそれを適切に、柔軟に挿入することが有用であると主張したいのである。

同様の主張は、近年、日本の英語史研究者たちから数多く発せられるようになってきた(岸田・早坂・奥村(2002), 寺澤(2008, 2013), 寺澤・川端・山本(2018), 堀田(2011, 2016), 田辺(2017), 脇本(2010)など<sup>2)</sup>。また、『英語教育』(2014年9月号)で「英語のなぜを解きほぐす―指導に役立つ英語史―」という特集が組まれたり、2014年に開催された日本英文学会第86

<sup>2)</sup> 英語教育というより生成文法理論的な視点を前面に出してはいるが、中尾・児馬(1990)も現代英語文法の解明に歴史の観点から迫ろうとした最も初期の試みと言える。

回大会においては「グローバル時代の英語教育—英語史からの貢献」というシンポジウム（家入葉子・寺澤盾・谷明信・池田真）が持たれたりもしている<sup>3</sup>。英語史の流れを大局的に示す形式から学習者の抱える1つ1つの「なぜ？」にQ and A形式で答える形式まで、また外面史や文化に焦点を当てたもの、語彙のみに焦点を当てたもの、文法変化の理論分析まで網羅したものなど、題材や守備範囲、方法は様々であるが、いずれも英語史研究と英語教育とのコラボレーションの必要性を強く訴えている。

本稿も同じ目的を掲げるものであるが、ここでは通史に重点をおくのではなく、史実を断片的に列挙するのでもなく、*I have a book* という1文を例にとり、最も初歩の学習者が感じる「なぜ」に歴史から答えていくことにしたい<sup>4</sup>。小さな「なぜ」に史的な説明を加えていくことで、英語の体系的な姿が自ずと浮かび上がってくるからである。

## 2. *I have a book* に感じる素朴な疑問

学習の最も初期段階で学ぶこの1文にして既に、日本語母語話者には不合理と感じられる点が多々存在している。飲み込めない思いに立ち止まり、「そういうものだから覚えるしかない」と諭されて無理に飲み込もうとしてきた覚えのある人も多いのではないだろうか。本節では、発音と綴り字、語順、格の示し方、冠詞、屈折語尾の項目に分け、英語史の知識のどの部分をどのように提示することができるか考えていく。

### 2.1 *b-o-o-k* と書いてなぜ「ブック」？—発音と綴り字

「日本語では『ほ』『ん』と書いて『ほん』と読むのに、なぜ *book* はビー・

<sup>3</sup> 海外では既に1990年代から、英語史関係の学会のワークショップやメーリングリストなどで問題意識が共有され、英語史の専門的問題以外に、英語史をどのように教えるべきかについても盛んに討論されていた（谷(2005)）。

<sup>4</sup> この方法と内容は、筆者の講演「英文法の『なぜ』を楽しむ—*I have a book* をめぐって」（『専修大学法学部140回連続講演会』第22回、2016年6月16日）を発展、拡充させたものである。

オー・オー・ケイと読まず『ブック』と読むのですか？」

これは筆者自身が中学1年の教室で発した素朴な質問であった。残念ながら教師から解答はなく、そういうことを聞いてはいけないとたしなめられた恥ずかしさのみの苦い記憶として痛烈に残っている。今となると、良い質問をした中1の自分を褒めてやり、教師の怠慢をそしりたい思いにかられるのだが。

この問いに対しては2つのレベルの説明が必要である。1つめに、英語は日本語とは異なり文字の名前と音価が同じではないということ、2つめに、英語は文字と音、あるいは綴りと音が1対1で対応しない言語であるということ。

特に1点めは英語史以前の話なのだが、英語と日本語の違いとして十分に認識できていない学生は多い。すなわち、日本語は文字の名前・読み方がそのままその文字の音を示しており、それはどのような環境に現れても変わらないので綴りと発音の関係を学ぶ必要はないのだが、英語においては文字の名前と音価が一致していない、そればかりか1つの文字が表す音価が1つではないということである。例えば文字 **b** の名前は /bi:/ であるが一般的には /b/ という音価を表す。しかし必ず /b/ ということでもなく、*climb/comb* のように発音されないこともある。また、*book* という綴りは /bok/ と発音されるが、同じ *oo* という綴りが *food/room* においては /u:/、*blood/flood* においては /ʌ/ と発音される。

アイルランドの劇作家 George Bernard Shaw が英語の綴り字と音あまりにも呼応しないことを風刺して、*fish* /fɪʃ/ はいっそのこと *ghoti* と綴ることにしてはどうか (*laugh* の /l/, *women* の /ɪ/, *nation* の /ʃ/) の連続なのだから) と言ったのは有名な話であるが、同じ *ghoti* をもし *though*, *people*, *ballet*, *business* における下線部の音価の連鎖と考えたらどうであろう。まったくの無音になってしまうはずである。ことほど左様に、英語の綴り字と音の関係は不規則、不合理なのである。学習者にとって納得がいかないのは当然である。

まず学習者に想起させるべきことは、そもそも全ての言語は第一義的には

音声であり、文字はそれを記録するための記号として発明されたという事実である。であれば文字は音を明示する仕組みであるはずで、合理的に対応してしかるべきである。もちろん、英語もその例外ではない。というより、例外ではなかった。英語の綴り字も、古い時代には発音をそのまま写すものであって、ooと記された語は全て /oo/ と発音されていたからこそそのような記されたのだ。そのままの習慣を維持していたなら、現代の学習者たちが英語の発音に悩む必要は全くなかったはずである。

その状況は一体いつ、どうして変わってしまったのだろうか。

一般に、英語の綴り字と音の乖離が生じたのは、1500年頃であると言われている。「英詩の父」と称されるチョーサー（1340?-1400）の作品とおおよそ200年後のシェイクスピア（1564-1616）の作品を比較すると、韻の踏み方が変化しており、同じooの綴り字を持っていても押韻できる語とそうでない語が分かれてくることが見て取れる。これは即ち、チョーサーとシェイクスピアの間にooの発音が1種類ではなくなったことを意味する。

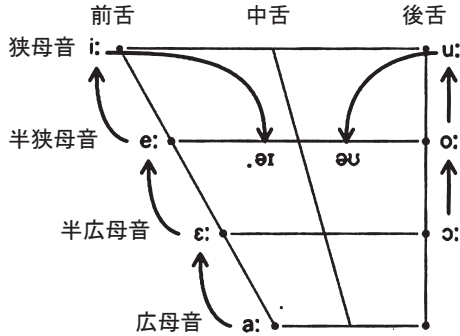
英語は1500年前後、社会的にも言語的にも大きな転換期に遭遇していた。第一に、11世紀から続いたノルマン人の支配により教養も文化もない被支配者層のことばとして完全に力を失っていた英語が、14世紀後半から中産階級の台頭や自国語意識の芽生えとともに徐々に使用されるようになったことがあげられる。チョーサーが英語を用いて物語を書いたこともきっかけの一つとなり、英語は徐々に地位を上げつつあった。

その100年ほど後、1476年にカクストンによる最初の印刷機が出現する。それ以前はそれぞれが各自の方言で羊皮紙や木の皮に書いていたものが活版印刷によって比較的安く多量に流通するようになり、その結果、ロンドン、ウェストミンスター方言の音を写した綴り字が固定され伝搬されて標準語が確立することになった。

加えて決定的なのは、この時代に英語という言語自体に大きな文法変化が起きたことであつた。その中で綴り字と発音の關係に大きな影響を与えたのが大母音推移（Great Vowel Shift）である。この変化は、「どんな環境でも例

外なく、全ての長母音の調音点（発音する際の舌の位置）が1段階（もしくは2段階）ずつ上がる」という非常に大掛かりな音変化であった（図1）。

図1 大母音推移



この大変化のメカニズムは未だに解明できていないのだが、ただ一つ確実に言えるのは、これが英語の綴り字と発音の決定的な乖離を引き起こしたということである。英語はこの後もいくつかの音変化を経験するが、綴り字は既に印刷術の発達によって固定されていたため音との乖離はさらに大きくなることになった（表1）。

表1：大母音推移前後の発音比較

中英語期まで (1400年頃まで)	大母音推移		後期近代英語から (1700年頃から)	単語例
	第1段階	第2段階		
i:	əɪ	-	aɪ	child, wife
u:	əʊ	-	aʊ	house, town
e:	i:	-	-	agree, cheese
ε:	e:	i:	-	each, meat
o:	u:	-	-	choose, moon
ɔ:	o:	-	oʊ	coat, road
a:	ε:	e:	eɪ	name, take

さて、ここでそもそもの問い「*book* はなぜ /bok/ と読むのか」に戻ることにしよう。既に述べたように、英語も最も古い時代には発音通りに綴っていたのだから oo は /o:/ であった。それが大母音推移によって1段階上がり、そのまま現代語まで残ったのであれば *choose* や *moon* のように /u:/ と発音されたはずであった。

ところが oo という綴り字は、その後さらに① /u:/>/ʊ/, ② /ʊ/ > /ʌ/ という2種類の音変化を受ける運命を辿る。この2つの変化は大母音推移のように「例外なくすべての環境に」かかった変化ではなかったので、*book, good, hood* などは①のみを受けたところで止まり、*blood, flood* などは①②両方の変化を受けた。その結果、現代英語では同じ oo という綴り字を持つ語にこれら3種類の発音が現れることになったのである。

現代語の綴り字 ea に3種類の発音 (/i:/ (*each, meat*), /ɛ/ (*bread, head*), /eɪ/ (*break, great*) が現れる理由も、同様な経緯によって説明できる<sup>5</sup>。

言うまでもなく、こうした史的音変化の詳細を事細かに英語学習者に理解させる必要は全くない。ただ、学習者が綴り字と発音の不合理について納得できずに躓いている折に、背景にある理由の一端を適宜紹介することは英語教員の義務ではないだろうか。1つ1つの発音を覚えなければならないという学習者の負担をなくすことはできないまでも、不合理に対する不安・不満を納得に変え、「生きもの」としての英語への知的好奇心を広げてくれるはずである。

## 2.2 SOV vs. SVO — 格表示と語順のせめぎ合い

日本語では「私は」「本を」「持っている」と言うのに、英語は「私は」「持っている」「本を」。なんでこんな妙な順番で言わなくてはいけないのだろう。いや、日本語だったら必ずしもこの語順でなくて「本を私は持っている」と言うこともあるし、主語や助詞を省いて「持ってるよ、本」と言うこともあ

<sup>5</sup> 英語教員が知っておくべき音変化の基礎としては、大名 (2014:214-226) の整理が要を得ており有用である。



るのに、なぜ英語の語順はこんなに厳格なのだろう。

大学の英語授業においても、英文を日本語に直すことはある程度できていても、英語で表現させてみると日本語の語順のまま逐語訳をしてしまう学生は一定数存在する。英語における語順の意味がまったく認識できていないからである。これについても、史的变化について少しだけ情報を与えることで納得させ先へ進めることができる。

興味深いことに、英語も歴史を辿ってみると一貫して VO 語順を保っていたわけではなく、時代を遡るにつれて VO の割合は徐々に減っていくことがわかる。VO 語順は 1400 年頃には 85%、1000 年前後の古英語まで遡ると OV と VO の割合はほぼ半数ずつであった<sup>6</sup>。つまり英語は OV と VO が共存する状態から VO 専一に移行した言語なのである。

それにしても、「本を持つ」と「持つ本を」が共存する言語などというものが可能なのだろうか。

ここで日本語に立ち戻って考えてみると、前述したように、日本語の語順は基本的に OV であるとは言え英語ほど厳格ではなく、文脈や言語使用域 (register) によってさまざまな形式で表しうることに気づく (「本は私が持っています」「本を持っています、私は」「私は持っていますよ、本を」等々)。それらが意味の混乱を招かないのは、日本語には文中での役割を明示する助詞があるからである。

それでは、英語では日本語の助詞に相当する要素、「私は」の「は」や「本を」の「を」はいったいどこに行ってしまったのか。勘のいい学生であれば、*my/me* の存在から *I* の意味には「は」(主格)までが含まれていることに気づくであろうし、第二外国語でドイツ語やロシア語を学んでいる学生の中には、英語の普通名詞には格を表す形態的手段がないことに思い至る者もいるかもしれない。ドイツ語もしくはロシア語などと比べて、それは文法として

<sup>6</sup> もう少し正確に言うと、古英語は従属節では OV 語順を示すが主節では VO 語順を示す傾向があり、古英語の祖先語が取っていた語順 SOV から SVO への推移段階にあるように見える (中尾・寺島 (1988:71))。

曖昧なのではないか、と。

まさにそのとおりで、英語も古い時代にはこれらの言語と同様、格を示すための厳密な屈折語尾を持っていた。代名詞だけでなく名詞も、またそれに付随する冠詞・形容詞も文中での役割を屈折語尾で表しており、その結果、助詞をもつ日本語と同じように、語順に厳密なルールがなくとも文意が混乱することはなかった。*Se hlāford lufað þa hlœfdigan* (The lord loves the lady) において *se hlāford* (the lord) が主語で *þa hlœfdigan* (the lady) が目的語であることは冠詞と名詞の屈折語尾から明らかであり、主語と目的語の語順を入れ替えて *þa hlœfdigan lufað se hlāford* としても文意が変わることはない。現代語では *The lord loves the lady* と *The lady loves the lord* の意味が異なることは言うまでもない。

ところが英語の格語尾は時代とともに衰退していく。その理由はおそらく、ゲルマン言語の特徴として第1音節に強勢が置かれることが多かったため、語末の屈折要素は曖昧にしか発音されず保持されにくかったことがあるだろう。細かい音情報が失われ全ての格が水平化してしまうと、文意の誤解を招かないためには語順によってそれぞれの語の意味役割を明示するしかなくなった。古英語から近代英語に至る数百年をかけ、英語は文法情報を伝える手段を語の形（形態）から語の配列（統語）へと大転換させたのである。

ところで、その際 **OV** 語順でなく **VO** 語順を選んだのはなぜだったのであろうか。古英語期に両方の語順が拮抗していたのであれば、**OV** が選ばれてもよかったようにも思える。しかし実際はその時代、動詞の前は主語、動詞の後には目的語の位置であるという傾向、つまり **OV** より **VO** が好まれる下地がすでに出来上がりつつあった（注6参照）。屈折語尾が完全に水平化したのは中英語になってからであるが、それら二つの流れが相俟って現代英文法の方角を決めたのである。

そして、当時の英語を選んだのは動詞と目的語の語順だけではなかった。類型論的に、動詞と目的語の位置関係は前置詞と名詞、先行詞と関係節、助動詞と本動詞の位置関係などと強く連動するということが指摘されており、

英語が VO を選んだということは、前置詞＋名詞，先行詞＋関係節，助動詞＋本動詞という英語の語順も同時に決まったということである。もし古英語が VO の方向へ舵を取っていたなら，現代英語においてもこれら全ての要素の語順が日本語と同じになっていたかも知れないわけで，そうであれば英語学習は日本語話者にとってずいぶん容易になっていたに違いない。

教室で投げかける問いとしてもっと生産的なのは，そもそもなぜ英語では屈折語尾の水平化が早く進んだのかと考えさせてみることである。屈折語尾があまり強く発音されないのは他の言語でも同様であるのに，例えばドイツ語では現代に至るまで格語尾が保持されているではないか。英語はなぜ早々と格語尾を失い，別の文法手段に活路を見出すことになったのか。

それを考えるために，当時のブリテン島が異民族の激しい侵略を受けていた史実が手掛かりとなる。当時の英語話者たちは，異なる言語を話すヴァイキングと共存するため，屈折語尾の微妙な差異を水平化し語順を固定化することでコミュニケーションを容易にしたのだと想像できる。その有様は，近代になって外国人が通商のために簡略化して作り出したピジン英語，あるいはグローバル化が進む現在，様々な外国語話者によって習得され使用されることで水平化・多様化していく Englishes の様態を連想させて学習者の興味を引くであろう。英語は，当時も今も時代の中で生きており，現在進行形で変化を続けているのである。

### 2.3 a って何？— 訳せないもの

さて，*I have a book* で次に問題になるのは冠詞 *a* の存在である。*a* は「1つの」の意味で単数名詞に付けると教えられるが，そもそも日本語母語話者としてはそのようなことをわざわざ言う必要を感じない。日本語で使う習慣がないから常に付け忘れ，一生懸命注意して *I like a book* と言えばそういうときは *the book* か *books* だと直され，*I ate a chicken* と表現すればその *a* は不要だと直される。さらに名詞が母音で始まれば *an* にしなければならない。冠詞は上級者にとっても常に悩みの種であるが，英単語の意味を日本語と 1 対 1

対応で捉えがちな初学者にとっては存在そのものが謎であるに違いない。

実は冠詞は、古い時代の英語においては確立した文法要素ではなかった。*a* の起源は古英語の *ān* (= 数詞、形容詞の *one*) に遡ることができるが、「1つ (の)」という意味を強調する時には強勢を伴って /a:n/ と発音され、/o:n/ > /wo:n/ > /wu:n/ > /wun/ > /wʌn/ という音変化を辿って現代英語の *one* に到達した。その意味を特に強調する必要がないときには短化・弱化して /an/ > /ən/ > /ə/ となり、これが不定冠詞 *a* の起源となった。不定冠詞として現代語に近い用法が出来上がったのは 13 世紀頃になってからのことである。

一方、定冠詞 *the* の方は指示代名詞男性形 *se* の屈折変化が失われたことに端を発し、不定冠詞より少し早く、12 世紀頃に現代語とほぼ同じ用法を確立していたと言われる。

上記の歴史変化から英語学習者が学ぶべきことは 3 点ある。第一に、もともとは確かに「1つ (の)」という意味があったが、その意味が薄れてできたのが不定冠詞 *a/an* であるということ、第二に、あくまでも *an* が先で *a* は後から出現したということ、つまり、母音の前で *-n* を付けると考えるよりも子音の前で (発音が弱まって) *-n* が落ちたと考える方が事実に近いということ。そして第三に、不定冠詞 *a* は少し前に確立していた *the* に倣って、おそらく文法の整合性のために確立した要素であり範疇であるということである。

最初の 2 点は理解しやすく、*alone* < *all* + *one*, *only* < *one* + *-ly*, *none* < *no* + *one*, *any* < *one* + *-y* などの語の由来との関連や、母音の前のみで /n/ が現れる理由などが理解できて、学習者にとって飲み込みやすいと思われるが、3 点めはもう少し説明を要するであろう。「*the* が確立した後で文法を整えるために *a* が確立した」というのは、英語においては *the* の存在をきっかけに名詞の前のスロットが名詞の *definiteness* (限定性)、つまり当該の名詞が特定のものを指すことを明示する位置として発達し、次に、その構造の整合性を上げるために、「限定的でない」ことを示す *a* がその位置を占める要素として発達したということである。言い換えれば、古くから存在した指示詞や形容詞・数詞が歴史の流れの中で構造や文法的な機能を変化させ、徐々に冠

詞という範疇を確立させてきたということになる。

留意すべきなのは、この冠詞という範疇が現代英語において果たしている役割は、日本語話者が感じるよりはるかに重要であるということである。前節で、動詞と目的語の位置関係は前置詞と名詞、先行詞と関係節などの位置を決定するというに言及したが、この類型論的な言語事実を生成文法の術語によって表現すると、言語は「主要部先行型」と「主要部後置型」の2つに分類することができるということである。主要部という概念そのものがかなり理論的になるのでここでは詳しい定義を割愛するが、この理論的枠組みにおいては、名詞句は決定詞（その名詞の限定性を明示する冠詞などの要素）を主要部とする句、英語で言うと *Noun Phrase* ではなくて *Determiner Phrase* であると分析される。名詞句の主要部は決定詞であり、主要部先行型の英語においては名詞の前には決定詞が置かれなければならないのである。

従って、冠詞は、日本語母語話者が感じがちのように「名詞の付け足し」や「あってもなくても意味が変わらない要素」では断じてない。上述のような理論的説明は英語授業に馴染まないにしても、少なくとも、冠詞を「1つの」「その」と和訳してわかったつもりになることは厳に避けなければならない。まして、前述したように *a/an* は「1つの」の意味が薄れたときにできた形式なのである。中心的な意味は「1つの」ではなくむしろ「限定されない」ことであって、その意味で *the* と対立しているのだと認識させる必要がある。

冠詞の重要性について教室で説明するとき、筆者はしばしば *Last night, I ate a chicken in the backyard* に対するマーク・ピーターセンのコメントを引用する。この英文は日本語話者である彼の友人が庭でバーベキューをして鶏肉を食べたことを伝えてきたものであったが、ピーターセン曰く、無冠詞で使うべき *chicken* に冠詞 *a* を付けてしまったこの文を読むと、「夜がふけて暗くなってきた裏庭で、友だちが血と羽だらけの口元に微笑を浮かべながら、ふくらんだ腹を満足そうに撫でている——このように生き生きとした情景が浮かんでくる」のだそうである（ピーターセン (1988:11)）。どうやら *a* や *the* が伝達する意味内容は日本語話者の想像を超えているようだ。もしかし

たら英語話者は、名詞の意味内容より先に、それが特定のものなのかどれでもよい任意の1つなのか、物質なのか個別のものなのかを感じながら会話しているのかもしれない。

### 2.4 3 人称単数現在の '-s' — 規則と例外

本節では *I have a book* を少しだけ人称活用し、*He/She has a book* を考えることにする。ここで学習者を悩ませるのは、主語が3人称単数現在（以後、3単現と称する）で動詞に付加する *-s* は一体何かという問題である<sup>7</sup>。これも2.3節で見た冠詞と同じく、日本語にない概念であるにもかかわらず何の説明もなく機械的に付けることを強要され、付け忘れれば減点される、英語嫌い製造要因の1つとなっているのではないだろうか。

問題の中心は3単現「だけ」に *-s* を付けるという点にある。2人称単数や3人称複数では不要である要素がなぜここだけに必要なのか、それは何のためなのか。

これらの疑問についても、英語史にわずかに言及するだけで納得できる答えを得ることができる。すなわち、古い時代の英語では動詞が全ての人称と数に対して活用語尾を持っていたが<sup>8</sup>、時を経るに従ってそのほとんどが失われ、3単現の *-s* だけが現代語まで残ったということなのだ。

具体的には、古英語では直說法現在1人称単数 *-e*、2人称単数 *-est*、3人称単数 *-ep*、複数形は全ての人称で *-ap* という活用語尾が用いられていたが、15世紀末になると複数形接辞は *-en* に弱化し、現代英語に至るまでには *-ep* から *-eth* ~ *-es* を経て規則化した3単現 *-s* 以外の語尾は全て失われてしまった。つまり、*-s* を3単現「だけに」付加する要素と捉えるのは誤りで、もともと

<sup>7</sup> 最も初歩段階の英文法を論じていながら、いきなり不規則変化の *have/has* を例として扱わなければならないことに些か気がとがめる。この例に限らず、古い時代の不規則変化が現代まで残りやすいのは使用頻度の高い基本語彙であるため、中学では往々にして規則より先に例外を学ばせなければならないことがある。この問題については次節で論じることにする。

<sup>8</sup> 厳密には、古英語時代の動詞は法（直說法・仮定法・命令法）、時制（現在・過去）、人称（1, 2, 3人称）、数（単数・複数）という4つの範疇で活用変化していた。

全ての人称にあったのにそれ「以外」が全て消失してしまった、3単現はその最後の名残と捉えるべきなのである。

全ての動詞に付加する要素であるならそれらは文法の中で一定の役割を果たしていたはずで、3単現だけを示すマーカーとして付加するよりシステムとして自然に感じられるであろう。その役割とは、法、時制や主語の人称や数などの情報を正確に伝えることであった。すでに見たように古英語の語順はかなり自由であったが、動詞の屈折語尾がしっかり表されていれば必ずしも主語が表されていないとも文意に誤解を招くことはなかった。

そうした重要な役割を果たしていた要素が時間の経過とともに失われていったのは、第一義的には、2.2節で見た名詞の格語尾と同様、音声的な弱化によるものであったであろう。しかし同時に、この変化は主語の義務化や語順の固定などによっても促進された。動詞の前に主語を置くことが義務的となれば、その主語の人称や数を再度動詞の語尾で示す必要はなくなるのだから。この変化も、単純に音が省エネされた結果なのではなく、文情報を伝える手段を「形態」から「統語」に変えたことによる文法変化なのである。

そういう観点に立てば、現代英語においても3単現だけをあえて表示する必要は全くないはずである。にもかかわらずそれが残っているのは、単純にこの音要素の顕在性、つまり /s/ という歯茎摩擦音が発音しやすく耳に残りやすいからであると言われている。古英語期にたくさんあった名詞の複数を表す形式が -(e)s に収束し規則化したことも、名詞の多様な格表示のうち所有格の -s だけが残ったことも、同じ事情によると推察できる。結果として、現代英語の /s/z/ 音は多様な情報を伝える要素になってしまったわけで、これはこれで曖昧になったとも言える。もしかしたら、これらのうち既に必然性を失っている3単現の -s などは、そう遠くない将来に英語から失われる運命なのかもしれない。

教室では「3単現」という言い回しは知っていてもそれが具体的に何を指すのかさえ説明できない学生に出会うことがある。英語学習の最も初期の段階でサンタンゲンサンタンゲンと呪文のように覚えさせられ、納得できない

まま飲み込もうとしてきた学生たちが気の毒でならなくなるのはそんな時である。3 単現の *-s* は意味もなく動詞に付加する要素なのではなく、主語を明示する機能を果たす一般的な屈折の 1 つであること、そして歴史とともにその機能が不要になり英文法から消えていく中で 1 つだけ「例外的に」現代まで残った痕跡であること。この 2 つを知っているだけで、かなり飲み込みやすくなり定着も変わってくるのではないかと思う。繰り返すが、史の変遷を詳細に説明したり完全に理解させたりする必要は全くない。ほんの 10 分かけて、「3 単現」の素性と運命を知らせてあげれば事足りることなのだ。

## 2.5 まとめ—「例外」の背後にあるもの

2 節では英語学習者が *I have a book* の 1 文に接しただけで感じる「不合理」や「違和感」に対して、英語史にほんの少し言及すれば答えを与えられることを示してきた。英語は外国語なのだから理屈を超えて覚えなければならない部分は多い。しかし綴り字と発音、語順や格の示し方、冠詞や 3 単現の *-s* などいづれにおいても、けっして完全に恣意的にその形をとっているわけではないのだ。英語がどうしてもそのような姿をしているのかを歴史的な経緯から納得できることは、英語学習の効率を上げるために非常に有用なのである。

最後に、歴史の視点は特に英語学習の初期段階で必要と思われることを強調しておきたい。2.4 節（注 7）で 3 単現の例としてわざわざ不規則形の *has* を扱う後ろめたさについて言及したが、英語には基本中の基本のような語彙にむしろ「不規則」が多いという問題がある。基本語彙は生活に密着して使用頻度が高いため規則化に抵抗して古い時代の形式が保持されやすく、しかし一方で基本語彙であるからこそ学習の初期段階で学ばせたいというディレンマが生じるのだ。その結果学習者は、基本ルールを十分に習得する前に無数の例外を学ばなければならないということになる。

「名詞複数形の *-(e)s*」や「動詞過去形・過去分詞形の *-(e)d*」も英語を学び始めてすぐに出てくる形態規則だが、学習者はそれらの規則を学ぶとほぼ同時に、*man/men, foot/feet; write/wrote/written, see/saw/seen* といった不規



則変化を暗記させられることになる。これらの不規則変化も実は母音交替によって屈折を表すという「規則」が存在したゆえなのだが、そんな情報が与えられることもない。意味もわからず暗記しなければならない「例外」の多さに嫌気が差し、「規則」に不信を抱くようになっても無理からぬところではないだろうか。

例えば数字の羅列にしても、無意味にランダムに並んだそれを覚えるのは苦痛でも、何らかの合理性や意味を読み取れるものであれば記憶しやすいということがある。一つ一つ覚える負担自体は変わらなくても、不規則形が生じたのにはそれなりの理由があることを知れば納得でき、先に進むことができる。使える英語を身につけるために学習初期段階でこれほど多くの不規則形を習得させなければならない以上、特にその段階で英語史の視点を教え、不規則形が存在する理由を知らせることが学習者の関心や意欲を削がないために極めて重要であると考えられる。

### 3. 結語

以上、本稿では、現代英文法において不合理に見える現象の背後には歴史的な理由があり、その知識を適切に導入することで英語教育の効率を上げられることを述べてきた。*I have a book* をめぐるほんの一端を紹介したに過ぎないが、それでも学習初期に出会う小さな「なぜ」が腑に落ちたのみでなく、英語が史的に辿ってきた大きな文法変化の流れ、ひいては英語を超えて、人間言語の体系的なあり方が垣間見えたのではないだろうか。

英語を学ぶプロセスにおいてはこの後もまだまだ数え切れないほどの不合理に出会うことになる。たとえばこの文が否定文、疑問文になると登場する *do* とは何なのか、*be* 動詞の時と否定・疑問の表し方が違うのはなぜなのか、その他にも、法助動詞、進行形、受動態、関係節など、学習者がつまずきがちなトピックは枚挙にいとまがない。その多くについて、英語史の知識は新しい視点や合理的な説明を与えることができるのである。

納得がいけば覚えられるし、自分のものになれば使えるものである。納得

がいかなくとも「外国語なのだから」「そういうものとして」受け入れ習得することのできる柔順な学習者ももちろんいるだろうが、一方で、どうしても飲み込めず、自らの違和感を自覚したり言語化したりすることもできないまま英語嫌いになってしまう学習者も多いに違いない。筆者の限られた経験においても、中学・高校までの英語教育の中で英語史についての情報を適切に与えられてきた学生と、全く与えられてこなかった学生の差を感じることは多い。「英語は暗記科目だからひたすら暗記して乗り切ってきました」という学生が、史的要素を含めた文法説明を聞いた途端目を輝かせ「それで行った！」と叫ぶ瞬間にも何度も立ち会ってきた。

文法は本来、自由な広がりのある規則体系である。学んだことのある文しか理解できず生産できないのでは文法と言えず、学ぶ甲斐がない。歴史言語学の泰斗 Matti Rissanen が主張するように、学習の対象言語がなぜ現在あるような構造を持つのか、なぜ現在あるような機能を果たすのかが理解できなければ、ほんとうの意味でその言語が使えるようにはならないのではないか。そして、それを理解するための唯一の方法は、その言語の発達と、常に変化している言語の性質を知ることである<sup>9</sup>。

英語史の視点を英語教育に取り込むことは、英語という言語の姿を一般性に照らして理解させてくれ、母語を含めた言語一般に対する理解も深めてく

<sup>9</sup> 英語史研究・教育を強力に牽引し2018年1月に亡くなった彼に哀悼の意を表しつつ、少々長くなるが彼の示唆に富む主張を引用しておきたい。

The aim of all human knowledge is not only to understand 'how' but also to understand 'why'. The only way of understanding why a language is structured the way it is, why it functions the way it does, is through understanding its development and ever-changing nature. ...It is enough for a motor mechanic to know how a car functions and which screw to turn to repair it. But to be a planning engineer you have to know why a certain combination of steel and petrol makes a moving vehicle, how such combinations have been changed and developed over the decades to improve both mobility and safety, and what kind of developments are likely to give ever better results. We could also say that an awareness of the difference between 'how' and 'why' marks the difference between vocational schools and universities. This does not mean underestimating the value of vocational schools and car mechanics, but it is obvious that a higher education institution which fails to grasp this difference is doomed to mediocrity and loss of excellence (M. Rissanen (and the Team), *The Importance of Being Historical*).

れる。こうした健全で堅固な文法理解が、言語を真の意味で使えるレベルまで押し上げる原動力になると信じるものである。

### 参考文献

- 家入葉子 (2010) 「変容する英語と英語教育」, 『英語教育への新たな挑戦—英語教師の視点から』, 小迫勝, 瀬田幸人, 福永信哲, 脇本恭子 (編), 東京: 英宝社.
- 大名力 (2014) 『英語の文字・綴り字・発音のしくみ』 東京: 研究社.
- 小野茂・中尾俊夫 (1980) 『英語史 I』 東京: 大修館.
- 岸田隆之・早坂信・奥村直史 (2002) 『歴史から読み解く英語の謎』 東京: 教育出版株式会社. (= 岸田緑溪・早坂信・奥村直史 (2018) 『英語の謎—歴史でわかるコトバの疑問』 東京: KADOKAWA)
- 黒田龍之助 (2016) 『外国語を学ぶための言語学の考え方』 東京: 中央公論社.
- 田辺春美 (2017) 「英語史は役に立つか?—英語教育における英語史の貢献—」, 『成蹊英語英文学研究』 第 21 号, 95-113.
- 谷明信 (2005) 「わが国での英語史教育の問題と課題: 海外と比較して」, 『兵庫教育大学研究紀要』 第 27 巻, 87-94.
- 寺澤盾 (2008) 『英語の歴史—過去から未来への物語』 東京: 中央公論新社.
- 寺澤盾 (2013) 『聖書でたどる英語の歴史』 東京: 大修館書店.
- 寺澤盾・川端朋広・山本史歩子 (2018) 『英語教師のための英語史』 東京: 開拓社.
- 中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』 東京: 大修館.
- 中尾俊夫 (1989) 『英語史』 東京: 講談社.
- 中尾俊夫 (2003) 『変化する英語』 東京: ひつじ書房.
- 中尾俊夫・児馬修 (1990) 『歴史的にさぐる現代の英文法』 東京: 大修館.
- ピーターセン, マーク (1988) 『日本人の英語』 東京: 岩波書店.
- 堀田隆一 (2011) 『英語史で解きほぐす英語の誤解』 東京: 中央大学出版部.
- 堀田隆一 (2016) 『英語の「なぜ?」に答える—はじめての英語史』 東京: 研究社.
- 安井稔・久保田正人 (2014) 『知っておきたい英語の歴史』 開拓社叢書 24, 東京:

開拓社.

脇本恭子 (2010) 「英語史を通して学ぶ異文化・自文化理解—実践的指導に向けた英語学領域からのアプローチ」, 『英語教育への新たな挑戦—英語教師の視点から』, 小迫勝, 瀬田幸人, 福永信哲, 脇本恭子 (編), 東京: 英宝社.

Rissanen, M. (and the Team) *The Importance of Being Historical*. Retrieved from <https://www.univie.ac.at/Anglistik/ho/prissanen.htm>